

## 俺の出番はきつとくる



埼玉県

萩原 猶治

一企業戦士として残業や出張に明け暮れていた二十五年前の昭和五十四年、四十七歳の時に通勤途上の駅の階段を上っている時に、つまずいて転びそうになったのが始まりで、次第に両足が重くなり、右足の付け根に痛みが出てきたのを機会に検査入院した。脊髓造影、腎臓、前立腺、大腸などの検査、腰の牽引を行う都度痛む箇所が増え、体の右側四か所になった。痛みは十五秒くらい続いた後すーっと消え、十分くらい過ぎると四か所同時に痛みが出るという周期的なもので、痛みは最初の頃は弱く気になる程度だったが次第に強くなり、痛みが出る時はベッドに海老えびのように体を曲げ、顔をしかめ、

歯を食いしばって耐え、時には両足を突っ張ったり縮めたり、足と足を擦るようにもがくため、両足の脛毛すねが剃刀かみそりで剃そったようにすっかりなくなってしまう。痛み止めを飲んでも座薬を入れても効果がなく、地獄の苦しみを味わっていた。

総合的な検査の結果、難病である多発性硬化症という神経の病に侵されていることがわかり、痛みと四肢不全まひでもがき苦しんだ七年間を含め、十四回の入退院を繰り返し現在に至っている。入院生活を合計すると約三千日。小学校に入学してから中学を卒業するまで、学校に通った日数とほぼ同じで、最初の病院は会社が運営する病院で基本的な検査後、神経の専門病院である国立病院に転院、民間病院から国立病院にとそれらの病院を繰り返し渡り歩いた。

発病後六年目に八回目に入院した時に、今夜が山場と医師から言われ、親族全員を呼び集められた時には瞳孔が開き、血圧の測定が不能の状態だった。三途の川を渡りかけている時に母の悲痛な叫び声で蘇った。死に神からも見放され心を閉ざしたままの車いすの生活が続いた。現代医学ではどうにもできない私の病気だが、家内共々本当によく頑張ってきたと思う。それまではお互いに落ち込む事は何度も何度もあった。それも深い谷間に落ち込んで諦めかけたこともあり、一人では這い上がることも出来なかった。

## 家内は朝食宅配便

国立病院で治療方法が決められてから、家の近くの民間病院にリハビリを目的に転院したのは昭和五十八年の松の内が過ぎた頃だった。家内は毎朝食事を作って持ってきてくれた。それは病院の朝食が配膳される頃は冷たくなるため、少しでも温かい食事を食べさせようとする家内の心遣いだった。家内は二人の子どもの朝食とお弁当を作ってから、自転車で朝の食事時間に間に合うように、自宅で炊いたご飯、味噌汁、コーヒーをポットに入れて持ってきた。

この年の冬は雪の降る日が多かった。毎朝病室から窓越しに空模様を見ていたが、雪の日には「この雪では家内は来られないな」と思いながら朝食の配膳を待っていると、食事の時間に合わせて家内が息を切らせて来てくれた。雪の日も雨の日も息を弾ませながら一日も欠かさず来てくれるので何時も頭が下がる思いだった。特に雪の日には、一時間近くも雪を踏み締めながら歩いて持ってきてくれた時は、その都度驚きと申し訳ないと胸が熱くなる思いだった。食後の温かいコーヒーを二人で飲みながら、子どもたちのことや、病状のことなどを話す時が心休まる時間だったが、家内は家に戻ってから勤めに出るため、ゆっくりする事はできなかつたが、当時、神経の専門医が常駐していなかつたため病状が徐々に悪化し、国立病院に転院した。

俺の出番はきつとくる

昭和六十年七月、国立病院に八回目の入院中、生命の危機を脱してから半年近くも個室での寝たきり状態であったため、全身に力がなく、鼻をかんだり、くしゃみをする力もなく、五月のような薫風も寒く感じて不快感を増したり、体が思うように動かないため、イライラがつのるため家内を怒鳴ったりもした。体力も付かないまま日夜ベッドでの生活も飽きてきたので、小型のラジオを買ってもらった。指に力が無かったため、スイッチを押すことができず、その都度看護師さんにスイッチを入れてもらい、一日中ラジオを聞いていた。ある日、ラジオから流れる歌に耳を傾けていると『俺の出番はきつとくる』という歌詞に強く引きつけられた。そして、「何時の日か俺の出番が来るまでは、絶対に病気に負けないぞ」と心に誓い、私なりの替え歌にした。『俺が社会復帰するときがきつとくる』『俺の夢が達成する日がきつとくる』と胸の中で歌い続けた。これをバネに何日かかろうと、きつとその日が来る、その日までどんなことでも耐えて見せる、一度死んだ人間じゃないかと開き直った。この歌は私の脳裏から離れず、何かにつけ「俺の出番はきつと来る」と心で叫んでいた。

サリドマイド児

主治医の懸命の努力で病状が落ち着き、痛みも一時より弱くなってからベッドから車いすに移動するリハビリも終わった後、医師の判断で昭和六十一年十月に「国立身体障害者リハビリセンター病院」

に転院した。ある日、その日のリハビリが終わった午後、家族に買ってきてもらったスナック菓子和お茶のティーパックと湯飲み茶碗を持って、だれもない食堂ホールに行った。スナック菓子を食べようとして袋を破ろうとしたが、手や指に力が無いので破る事ができなかった。歯で破ろうとしても破れず、四苦八苦している時に、私の後ろから「おじさん！私が開けてあげる」という声がしてから直ぐに私の隣のいすに座った人を見ると、Tシャツを着た両手の無い若い女性だった。更によく見ると、右肩から指のようなものが一本出ていた。両手がないのに袋を破ることができはるはずがないし、馬鹿にされたのかと思つて黙つて無視していると、両足をテーブルの上に乗せた。それも簡単に乗せたため一瞬驚いたが、行儀の悪い女だなと一瞬間な感じがした。しかし、スナック菓子の袋を両足の親指と人差し指でつまみ、引つ張ると簡単に破いてしまった。よく見ると指が異常に長く、つまり手の指の役目をしたわけだ。「おじさん、どうぞ」と言われ、私の前にそのスナック菓子を置いてくれた。私は驚きと超人的な行為に驚得し目頭が熱くなった。その女性からそばに置いてあつた湯飲み茶碗を見ながら「お茶を飲むでしょ？」と言われたが、涙で声が出ないので頷くだけだった。彼女は食堂ホールの隅にあつた瞬間湯沸かし器の所まで行くと、片足を頭の上まで上げて、かかとでボタンを押してお湯を出した。右肩の所から出ている指のようなもので湯飲み茶碗を持ち、その中にお湯を流し込んだ。そして私の所に戻つてきてから、ティーパックの糸を指のようなものに絡めて湯飲み茶碗の中に入れてくれた。私は一連の動作に言葉も出なかつた。疑つて申し訳なかつたと心で詫びた。

落ち着いてから話を聞いてみると、「さおりちゃん」と言つて十八歳の女の子で、サリドマイドの被害者として生まれてから、そのまま施設に預けれ、親の愛情も知らずに十八歳になつてから職業訓練生として、職業訓練をしているとのこと。たまたま風邪を引いてしまったので病棟に入院した事がわかつた。この寒空にTシャツ一枚で素足だつた。いろいろ話を聞いていると、まさに超人的で、お風呂も一人で全部洗えるという。いくら考えても背中では洗えまいと思つた。ところが、どうしてどうして洗える方法があつた。タオルの四隅に吸盤を付け、両足で石鹸せっけんをつけて浴槽の壁に貼り付け、そこに背中を当てて背中を動かして洗うというのだ。小さい時からの訓練で、「私は今まで生活をしてきて、もしも両手があつたらいいと思つたことが一度もありませんし、物を持つこと以外は何も不自由しない」という。翌朝、顔を洗いに洗面所に行くと「さおりちゃん」は既に顔を洗つていた。洗面台の上に乗つてから腰を下ろし、両足の裏で手のひらのようにして洗つていた。サリドマイドの「さおりちゃん」の生きる姿には驚嘆した。この女性との衝撃的な出会いがなかったら、今の私はもっと無気力に過ごしていたかもしれないし、この女性の生きる姿に感動し、勇気づけられ、痛みを克服して望みを捨てまいと頑張り続けた。決められたメニューも無事にこなして退院。

### 優しい心遣い

家内が私の代理で北海道へ行く用事ができたため、家内は心配しながらの旅行ではということから、

平成九年十一月に特別養護老人ホームの三恵苑へ二泊三日のショートステイに行った。老人ホームとなると、ボケとか痴呆とか言われる老人たちが生活し、暗いというイメージが一般的と思われていたが、そのイメージは間違っていた。

入所して驚いた事は、年配の寮母さん（介護福祉士）たちの職場と思っていたところ、二十代の若い寮母さん、寮夫さんが多いことだった。どの寮母（男女）さんたちも老人に接する態度に優しさがあざを感じが良かった。夜勤は一人勤務で、オムツは就寝の頃に二十人以上の人に紙オムツをあてがい、朝方交換することのこと。仮眠は二時間と決められているものの、仮眠出来る状態ではなく、夜勤の勤務時間は午後五時頃から翌朝十時頃までで、翌朝の勤務を見ても手抜きする訳でもなく、接する態度にも変わりなく、この激務に若い寮母さん達からお世話を受ける入所者は幸せと思えた。

初日の夜半過ぎのオムツ交換の時に目が覚めると、寮母さんが「ごめんね」「ごめんね」と何回も謝ったり、「向こうを向いてくれる？」と自分の肉親以上の優しい言葉をかけていた。オムツ交換が終わってから寮母さんが老人に対して「ありがとう」という言葉を聞いて、その優しい言葉に「来て良かった」という気持ちになった。

翌朝、その寮母さんに、オムツ交換の時に、「ごめんね」と何回も言ったり、オムツ交換が終わってから老人に対して「ありがとう」と言ったのは「なぜですか？」と聞いてみた。その理由は、せっかく気持ちよく眠っているのに起こしてかわいそうという気持ちで交換しているので、「ごめんね」

と言いました。また「ありがとう」と言ったのは、オムツ交換をしやすいように、じっとしていたこと、つまり交換をしている時は動かなかったのも、オムツ交換がしやすかったのも「ありがとう」と言ったのですと返事が返ってきた。オムツ交換の時に動いたりする人が多いので困る時があるとも言っていた。寮母さんの詰め所のガラス戸に、「たった一言が人の心を傷つける。たった一言が人の心を温める」と書いてあり、それを忠実に実践している感じがした。

二日目の肌寒い朝方、窓側のA老人が何を思ったのかベッドから車いすに移り、そのままじっとしていた。廊下側のB老人がそれに気づき、ゆっくりとした動作で起き上がり、そしてAさんの所に来て、ベッドの隅にあったシャツやカーディガンを取り出し、後ろから肩に掛けてから自分のベッドに戻って行った。そのまま横になって寝るのかと思ったところ、自分の毛布を掛け布団の下から引っぱり出し、抱えてAさんの所に持って来て、今度は前から体を包むようにしてあげてから自分のベッドに戻って行った。Aさんは「ありがとう」とも言わず黙っていた。Bさんはベッドに戻ってから横になってAさんを見ていたが、Aさんはダルマさんのように手を出すこともできず身動き出来ない状態になったため、体を小刻みに動かす反動で車いすを動かし、廊下の方へ少し近づいて行ったが、体を動かしたため、せっかく掛けてくれた毛布が剥がれだして下に落ちそうになった。その動作と姿が滑稽で思わず声を出して笑ってしまった瞬間、私の両目から涙があふれ出した。この涙はなんだろうと思うと、それはBさんの汚れない純粹な優しさだった。Bさんは再び起き出して、剥がれ落ち



そうになっていたた毛布を掛け直した。二人の間には会話は全くなかったが、Aさんは心の中で「ありがとう」とお礼を言ったと思う。

退所する日の朝、迎えの車を待っている時に、寮母長さん（施設長のご婦人）から「眠れましたか？」と声を掛けられた。私は三日間の感想を素直に話すと、寮母長さんの目に光るものがあつた。「世間様は、特別養護老人ホームに対し暗いイメージを持っているのに、貴方あなたに少しでもご理解いただいてうれしい」と言われた。迎えの車が来て、この老人ホームを後にしたが、この初めての体験が後にシヨートステイやデイサービスを気持ちの上で容易に利用できるようになった他、ボケと言われている痴呆老人を含め、この老人ホームでお年寄りのお世話をする職員と、前記B老人の優しい心遣いを目の当たりにしたことは、どんな境遇な時でも優しさというものを持っていることを学んだ。

### 車椅子ダンス世界選手権大会

平成十年二月、今まで外へ出ることは以前よりは多くなってきたが、それは家内とかボランティアさんと一緒でなくては出られなかった。通院リハビリが一年過ぎた頃、一人で車いすを漕ぎながら通院できるようになった時、ボランティアさんから「幕張メッセで車椅子ダンスの世界選手権大会があるので、見に行つてご覧なさい」と言われた。日頃、お世話になつているボランティアさんの言葉に逆らえないので家族と一緒に見に行つた。世界選手権は主に欧州から十か国が参加し、不自由な体で来

日した選手の勇氣とカラフルで素晴らしい華麗な演技に魅了され、また、同時に行われた「全日本選抜車椅子ダンス選手権大会」に出場した選手の中に、車いすに乗った八十五歳とパートナーの七十一歳の女性のカップルが一次予選を突破し二次予選に進んだことに感動、「私と二十歳も違うあの高齢の女性が出来るとは俺だって出来る!!」と体が燃えた。いつの日かこの幕張メッセで踊ろうという大きな夢を持ち、その高齢女性が所属する友の会に入会した。レッスンにはボランテニアさんの協力で月二回の定例会に通った。元氣のよい高齢女性が多く、レッスンでは振り回されたり目が回ったり、筋肉痛が出たりして散々な目に遭ったが、次第にそれらを克服し快い疲労が伴って踊る楽しさを味わえるようになった。これにより精神的に一人歩きのできる日が急速に近付いてきた感じがした。

#### 全日本選抜車椅子ダンス選手権大会

平成十一年二月、所属する友の会の会長は、私たちの会は「競技に向かったのダンスではなく、楽しく踊ることが目的」ですから、勝敗抜きで幕張メッセで行われる「選手権大会」に出場するように言われた。車いすダンスを始めて三年後のことで、こんな大きな大会に出られることは想像もしていなかったのが驚きもあった。しかし、経験と実力から予選突破という高いハードルは超えられなかった。

## エレベーター事件

平成十二年十月、定期的に通院リハビリに通っている病院に行った時のことだった。リハビリが終わってから、二階から一人エレベーターに乗り下へ降りていった。一階に止まってドアが開き、狭いエレベーターから出ようとした時に、若い看護師さん三人が先に乗り込んできたので降りるのを邪魔された。バスでも電車でも降りる人が先であることは小さな子どもでも知ってる。私は「降りるのが先だろう！」と怒鳴った。小さな声で「すみません」という声が聞こえたが、もうこんな病院なんか来るもんかと、この時は思ったが、私には車いすダンスの選手権挑戦という夢があるので次の日に病院へ行った。診察券を医事課の診察券を入れる箱に入れるには、私の胸の高さのカウンターから少し奥にあるので手が届かない。したがってその都度、私と係員が互いに手を伸ばしてやっ手渡していた。所定の手続きが終わるとリハビリの利用券を手渡しで受領していたが、この日は違っていた。手続きを終えた女子係員は、受付の奥のカルテ倉庫を通って奥へ行き、離れたドアから出てきて、ニコニコ笑いながら私の所まできて目と目を同じ高さまで腰をかがめて、「おまちどうさま、リハビリには気をつけてください」と優しい笑顔で言ってくれた。「あー、この病院にはこんな優しい職員がいたんだ」と昨日のエレベーターでの嫌な事は吹き飛んだ感じだった。わざわざ持ってきてくれた事は、私が手を伸ばす負担を考えての行為と思えた。その後、この行為を見たと思われる他の職員が、

受付業務が忙しくない時には、持つてきてくれる職員が増えてきている。

## 再び選手権に挑戦

翌年の三月、二度目の挑戦をした。この大会は、競技の公正を推進するため、国際パラリンピック委員会認定の障害者スポーツとして、二つのクラスに分けて競技することになっている、クラス1、下半身に障害があり、かつ、上半身にも医学的または機能的な障害を有するものと健常者のカップル。お互いに両手をつないだままで踊るため動きが緩やかになる。私はこのクラスに認定された。クラス2、下半身に障害があり、上半身は障害がないものと健常者のカップル。このクラスの障害者の上半身は健常者並みであるため、両手を離してサンバのような動きの早い踊りができる。今回は、クラス1の出場者は十二組だけで、最初から準決勝戦になった。会長から、「失敗を恐れず、踊りを楽しみ、スマイルを忘れずに」と念を押すように言われていたため落ち着いて踊ることができた。決勝戦の壁は厚かったが、自分なりの踊りができたので夢の達成ができた。

## 目標の達成

私を介護してくださったボランティアさんの依頼で、平成十三年五月から「大宮市ボランティア連絡協議会」の事務担当の仕事に携わることができた。毎月の理事会に出席し、理事会報告書を作って

四十団体に郵送する仕事だったが、このボラ連が三市合併により、昨年から百十団体が参加する「さいたま市ボランティア連絡協議会」となり、引き続き理事会に出席し、カセットテープに録音しテープ起こしをして議事録を作成する仕事で、半人前までいかなくてもボランティア活動の入り口にたどり着いたと思っている。この仕事は社会福祉協議会に関係するため、平成十四年六月から、小・中学校の総合的な学習の中で、車いす体験のお手伝いと車いす生活者の生活についての講演を同協議会を通して小・中学校から依頼があり、月一回のペースで行っている。学校へ行くと教室で行う場合は四十人程度、体育館で行う場合は多い時で百六十人で、私の体験は日頃聞いたことのない内容なためか、ざわつきもなく、目を輝かせて聞いてくれるのが印象的で、「この時が待ちに待った本当の俺の出番がきた」と、その都度、胸を熱くしながら児童たちと向き合っている。これによってラジオから流れてきた『俺の出番はきつと来る』を聞いてから十七年かかった。その後、児童たちから送られる来る感想文に対して、一人ひとりに返事を書くことが生き甲斐になっている。

平成十五年二月に、「さいたま市立大宮西小学校の校長先生」から連絡があり、三月の卒業式に校長の式辞の中に、長い闘病生活で目標をたて、それに向かって努力を重ねた結果、夢の実現と完全に社会復帰できたことを、晴れの門出の日として卒業生に伝えたいと言われたので身に余る光栄と、ありがたいことで快く承諾した。また、より良く生きていくためには、多くの人と手を取り合っていくことが大切で、自分のことだけでなく他人のことも考えることのできる優しい気持ちや、困難であっ

でも希望を失わずに人と協力して挑戦する心の大切さを付け加えてもらった。

ここまですられたのは、節目節目に私と出会った方々の導きによるものであり、障害者になったのは不幸だったが、出会った人たちに恵まれていた。健常者だったらこのような出会いはなかった。今まで受けてきた多くのボランティアさんの恩を忘れずに、その善意を、優しさを、労りを、誰かに分かち合えるような生き方ができたらと常に心掛けています。

萩原 猶治

昭和八年二月十三日生まれ 埼玉県さいたま市  
在住

選評

人生四十七年を歩んできて、突然難病を背負った時、絶望を希望に変えるのは何だろうか。両腕がなくても足などを活かして身のまわりのものをこなす若い女性との出会いを、無気力克服の契機にし、療母さんの言葉かけに、どんな境遇にあっても優しさの大切さを学ぶ。そういう出会いをたえず自分の生きる糧にしていく萩原さんの開いた心の持ち方に、感銘を受けました。人はどんなに辛くても、生きていくとすばらしい出会いがあるんですね。

(柳田邦夫)